



W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第32号



16歳の春に捧げるシンフォニー

モーツァルトへの手紙 (その8)

会員番号 K.618 加藤 明

私にとってのモーツァルティアンたる矜持は、貴兄の音楽を毎日聴き続けることであるが、と同時に、より多くの現代人に貴兄の恵みをお伝えすることでもあります。

貴兄のおかげで、新たに一人の可愛らしいモーツァルティアーナを育てられそうです。

「うちの子、受験・・・失敗したようで・・・」と、毎日事務所で顔を突き合わせて仕事をしている仲間のKさんが呟くように言いました。

それを享けて、「大丈夫だって、親がかってに(合否の発表前に)決め付けちゃだめだよ・・・なあ・・・」と異口同音に曖昧な励まし方をしたものです。

高校受験が終わったあと、合格発表までの期間というのは本人もさることながら、その親御さんのストレスも並大抵ではないらしい。

実は知っているつもりでいたが、Kさんのお嬢さんが、晴れて中学を卒業し、高校進学的身であることを冒頭の不安げなセリフを耳にするまで気づかなかったのです。

私は高校受験に失敗したとしても、「親としては過剰に反応しないで、冷静に話し合って新たな進路を見極めたらいいよ」、とまるで失敗を想定したかのような、変な慰めともつかぬ考えを口走っていました。

そして、20年もの昔に、私も同じような不安な思いをしたことや、あの特有の締め付けられるような緊迫感が思い出されて、「昔とちっとも変わらないなあ」といった感慨にふけったりしました。

モーツァルトが14歳ころに書いた「カッサシオン」という多楽章の器楽曲があります(この「カッサシオン」をモーツァルトは三曲残している)。

別名「フィナル・ムジーク」ともいい、これは当時の習慣として、学校を卒業する際に領主や先生たちに敬意を表するために演奏する楽曲のこと。

若きモーツァルトのなかでも忘れられない軽快で優美な名曲であるが、私はこうしたやりとりの後、咄嗟にKさんのお嬢さんの卒業記念として、この「カッサシオン」のCDをプレゼントしようと思いついた。

合格とか不合格とかに左右されない卒業記念の「カッサシオン」なら、人生の通過儀礼に相応しく、もしかしたら、どういう結果であって喜んでもくれるのでは?と考えたからでした。

いよいよ合格発表の日がきました。

合格発表当日は何事も無く過ぎました。

そして、翌日Kさんはお休みの日であったが、

仲間の女性スタッフのEさんから、朝の挨拶と同時に、「Kさんのお嬢さん合格しましたよ！」と、暗雲を切り抜けた晴れ間の歓声が耳に刺さったのです。

私は「ああ、そう、よかったな・・・よかった、よかった！」と我がごとのようにその吉報に快哉を叫んでいました。

と同時に、「やっぱり、Kさんはかつてに思い込んで『ダメだった』、と言ってたんだな！」と、Eさんと二人高笑いに興じました。

一刻も早く、Kさんに「おめでとう！」と声をかけたくなかったのですが、(結婚式みたいに)「こんなに他人の幸せを祝福したくなることって、めずらしいことだなあ・・・」と思い起こしたりしたものです。

さて、晴れて高校進学を果たしたお嬢さんに何を贈ったらいいものか、「カッサシオン」は卒業用にとっておいたが、合格したとなれば話は違う。

そこで、ふと、思いついたのです。

お嬢さんと同年の16歳のモーツァルトが書いたポピュラーな名曲を。

「ザルツブルク・シンフォニー」(K.136からの三つのディベルティメント)といい、晴れやかで伸び伸びとした春の芽吹きを想わせる弦楽合奏の傑作を贈ることにしました。

これだったら、もしかしてモーツァルトとの出会いの曲になるかもしれない、という期待を込めてこの青春の一枚を贈ることにした、という訳です。

そしたら、仲間のEさんやYくんが、私が聞き古したこのCD(イ・ムジカ盤)にわざわざ女の子だからと、それらしく包装してくれて、プレゼント品としての体裁を整えてくれて、尚のこと嬉しさがこみ上げてきたものでした。

私はこの素敵な包装紙の上に、「おめでとう！末永くご愛聴ください」としたための付箋をつけて、翌日お母さんのKさんにさりげなく

手渡しました。

Kさんの驚きと、ここからの笑顔は特別なもので、忘れられない一瞬です。

それは締め付けられるような緊迫感から解放された喜びの笑顔であり、それを噛みしめた母の表情であり、好い仲間への感謝のお礼であったようであり、誰よりもお嬢さんがこしらえてくれた、得がたい至福感いっぱい表情であったと思います。



その後、私は初めてKさんのお嬢さんと対面を果たしました。

卒業した仲間との昼食会で、レストラン《なっぱ・はうす》(道の駅てんのう内)に来てくれたのです。

「CDありがとうございました！」。

挨拶にうかがった私を見つけるなり、先手をきって、淀みないはっきりとしたお礼の言葉でした。

Kさんにそっくり、眼差しがすっきりしていて、賢そうなひとりの青春を生きる女性が、屈託のない笑顔を称えて、そこにおりました。

「モーツァルトを一生の友にして欲しい・・・」と伝えようと思って挨拶に出向いたのですが、青春ど真ん中を生きる彼女のまぶしさに直面して、たじろいだ私は、ただただ「よかったね・・・ほんと・・・」というのが精一杯でした。

古典的作曲技法

会員番号 K.10 畠山久雄

偽ベートーベン問題

数ヶ月前のこと偽ベートーベン騒動というのがあった。耳は聞こえないが、空から降りてくる音を絶対音感を頼りに譜面にするなど、苦難を乗り越えた作曲家がいたという話である。

その後、ゴーストライターが作曲していたこと、耳も大して悪くないこと等の演技がばれ、先天性四肢障害の少女、3.11震災被災者など多くの人を騙していたことも判明した。なお、本物はベートーヴェンであるが偽物だからベートーベンで充分。

多くの方がマスコミを通じて偽ベートーベンを知ったので、マスコミが大衆を騙したことは疑う余地もない。真偽を調べて発表すべきマスコミは、騙されたと言いつけはできない。

騙されたマスコミ

クラシック音楽に詳しい人が偽物の取材をすれば騙されなかったであろう。少なくとも譜面を読めないこと、音楽的素養に乏しいことは見抜いたはず。さらに、耳の件も見抜けたかも知れない。

しかし、マスコミは大衆を意識して取材するので、その道に詳しい人に取材させたり記事を書かせることはしないようだ。

その道の専門家に記事を書かせても、大衆はもちろんのこと、マスコミ内でも理解できる人は少ない。したがって専門的記事が表に出ることはない。100人中1人しか理解できない記事はボツになるのだ。「かくかくしかじかで偽物を見抜いた」は、ボツ記事となる。

古典的作曲技法

ゴーストライターは、偽ベートーベンの依頼

で書かれた曲について、古典的作曲技法で息抜きのためで書いたと言っている。

では、古典的作曲技法を使わずに全身全霊を打ち込んで作曲したらどんな曲になるか。大衆が理解不能に陥ることは容易に想像できる。いわゆる説得力ある演奏とはかけ離れるであろう。現代音楽を理解できる優秀な方の能力には敬服するが、私はそのレベルに達していまいらしく苦手である。

☆

人類は蒸気機関や電気と出会い、生活を大きく変化させたが、人としての根幹は変わらない。美しいものを見て、良い香りに誘われ、自然に音を聴き、手に触れ、所有したいと願い、人で在り続けてきた。

この先、さらに美しいもの、良い香り、新しい音、新しい触感は発見される可能性はあるが、古典的作曲技法による音楽で悲しみ、恐れ、勇気、感動などを感じる日々はたぶん変わらない。巷に流れるアニメ・ドラマ・ドキュメント・ポップス・・・それらに付随する音は全て古典的作曲技法によるものである。

古典的作曲技法による音楽は、言葉や人種の壁を乗り越えて共通語となっているのだ。敬愛するモーツァルト氏も、もちろん古典的作曲技法の範囲で作曲している。

ジャック・ルーシェはバッハの「G線上のアリア」「ゴルトベルク変奏曲」をジャズ風に解釈し世界中で大ヒットを飛ばし、モーツァルトの「ピアノソナタ第10番第3楽章」ハイドンの「交響曲88番第4楽章」などもロックギタリストによりアレンジされているが、その手法は古典的編曲技法の域を出ない。

これを書きながらジャック・ルーシェ・トリ

オの管弦楽組曲第3番ガボットを聴いているが、自然に体が動いてしまっている。当然のこと「現代の音楽」と「現代音楽」は全く異なる。

大衆と専門家

さて、音楽の専門家が、原子力の専門家に音楽理論を伝えようとしても迷惑がられるだけ、その逆も同じであろう。世の中には専門家が多数存在するが、畑違いを単に寄せ集めれば大衆となるのでは自明の理である。

ご承知の通り、専門家は集団として活躍のステージが用意されてこそ力を発揮できる。上に立つ人は大衆の意見を聴くことも必要だが、専門家の意見にも耳を傾けても良いのではないか。

『混ぜればゴミ、分ければ資源』という標語があるが、『混ぜれば大衆、分ければ専門集団』という、いささか物議を醸し出す標語が私の頭の中を過ぎる。

☆

一方、専門家は大衆に分かりやすく伝える努力も必要であり、正確さを意識して大衆に理解されない道よりも、理解を優先する道を探るべきであろう。

アインシュタインの名言「相対性理論と女の子とのデートの共通点」は、男の子に相対性理

論を尋ねられた時の返事※であり、解りやすさを最優先している。

※熱いストーブの上に1分間手を載せてみてください。まるで1時間ぐらいに感じられるでしょう。ところがかわいい女の子と一緒に1時間座っていても、1分間ぐらいにしか感じられない。それが相対性というものです。※

おまけ

アインシュタインは、モーツァルトが特に好き、趣味でヴァイオリンを演奏したことが知られています。男の子に相対性理論を解りやすく説明できたのは音楽家としての素養が為せるものかも知れません。

さらに余談になりますが、いとこのアルフレート・アインシュタインは音楽学者で、ケッヘル目録の改訂（第3版）などに関わっております。「死ぬとはモーツァルトが聴けなくなる事だ。」とアインシュタインが発言したという話はそこそこ有名ですが、これはアルフレートの発言との説もあるようです。

古典的作曲技法は、偉大なる作曲家たちが分かり易く伝えようとしてきた成果品かもしれない。

ブータン紀行

会員番号 K.375 安藤正昭

檀家寺企画の県内曹洞宗僧侶団に入れてもらって、「やすらぎの国ブータン・寺院交流の旅」に参加できたことは幸運であった。なによりも、秋田に滞在したブータン僧ソンナム師とその姪チョデンさんの案内だったから、とても充実した旅であった。本屋さんで偶然にモーツァルト広場加藤代表に会ったことから、寄稿することになった。

日本人として初めてブータンに入国したのは、秋田市（土崎）出身の多田等観であろう。1913（大正2）年、ヒマラヤ山脈を越えてブータンに入り、苦難の末にチベット到達に成功して、多くの大蔵経典を日本に持ち帰った。当時の困難さとは比べるべくもないが、いまは、深夜に羽田空港を発ち、バンコク経由で翌日午前中にはブータンに入国できる。機内からヒマラヤ山脈を眺めながらのワクワクが、いよいよ「雷龍

の国」という時にハラハラに変わる。着陸態勢になると、翼が接触するのではと思うほどの山間に、旋回しながら進入して行った。

ブータン入国のこの日、さらにハラハラが続くことになる。パロ空港から首都ティンプーを経てプナカまでは、山中を曲がりくねる国道が一本だけ。ガードレールも無い道で、車の追い越しレースさながらの連続だったからである。頼りない路肩施工の簡易舗装道路で、スズキ・アルトやヒュンダイ（現代）のタクシー、タタのトラックが私どものトヨタ・コースターの右横すれすれを追い越す。四輪駆動車やド派手なペイントを施した装飾トラックが、減速なしで対向してすれ違う度に、車内には黄色い声上がり安堵の溜め息が繰り返された。標高3150mというドチュラ峠（ヒマラヤを見渡す）の石段で、軽い頭痛を感じた時に、「この国の人達は、高地だから急がずユックリ歩いている」と言われたが、車に乗ったら別人になるらしい。あったことか、道路工事のために山中で足止めされ、何十台もの車列の中で2時間ほど待たされた。ここでは、決して急がない国民性を理解する積もりでいたのに、通行止め解除と同時にカーレースも再開され、プナカのホテルに着いたのは予定3時間遅れの真っ暗闇の夜になっていた。

ブータン二日目の夜に、ソンナム師親族による歓迎パーティーがあった。まだ陽のあるうちに、ホテルの前庭で焚き火がはじまった。二月末の日中晴天でヒマラヤ山麓は、14～15度の気温が日暮れとともに急激に下がりだして零度くらいまでになる。男女十数人の民族音楽舞踊学校学生による歌と演奏が始まった。色彩豊かな民族衣装で、楽器は「ヤンチェ」（小型チェンバルン風）と「ダムニエン」（共鳴胴が皮張りのギター風）の伴奏と歌で踊る。野獣の仮面を冠った仮面舞踊もあり、演目の曲と踊りは一連の仏教物語となっているらしいが、ゾンカ語だからアリガタサが解らない。全ての曲がユニゾンでゆっくりのテンポが続き、最後の曲は

フォークダンス風の輪になったので、すかさず女学生の中に割り込んで一緒に踊った、というよりも握った手を離さなかつただけ。

今回のツアーではプナカ、ティンプー、パロの三都市（町）のゾンに入場参拝できた。ゾンは、政庁であるとともに寺院も同居している、いわば聖俗同居のお城か砦といった豪壮華麗な建造である。仏教はブータン王国の国教であるから、首都ティンプーのタシチョ・ゾンは、国王のオフィスであり仏教総本山ということになるだろうか。ゾンに入る国民は、民族衣装に男性はカムニという白の長いスカーフ、女性はラチュという手織りの布を肩に掛ける正装である。だから旅行者も、ラフな服装では入れない。ゾンの講堂内部は、大きなご本尊、壁から天井にいたるまで極彩色の曼荼羅と吉祥紋様（蓮華、法輪、宝瓶、法螺貝等々）で埋め尽くされた、まさに別世界である。ご本尊は、釈迦如来か、チベット仏教を伝えたグル・リンポチェや建国の父シャブドゥン像である。ご本尊の前でブータンの人々は五体投地する。頭上、顔の前、胸の前で合掌し、両膝をついて床に額をつけて立ち上がり、これを三度繰り返す。幼い子供から老人まで、ブータン人の「祈りの姿」には感銘した。これを見ながら慌てて合掌するのだが、動作は真似できても、「祈りのころ」までは届くはずもない。この「祈りの姿」に、帰国後もずうっと思いをめぐらしている。

「仏様の左乳首が右側よりも大きいね」と





言ったら、某寺の奥様に軽蔑の眼で見られたが、次のゾンでもそれを指摘したら、今度は同意してくれた。さんざんよからぬ痴説？を並べていたら、その某寺のご住職さんが見かねて「左肩からの天衣の厚み分が大きくなるのだ！」と。ブータンの仏像はそこまで写実的だったのだ。薬師寺展や法隆寺特別展など各地で開催されるように、美術的？な見方からすると日本の仏像が優れていると思われる。だが、多くの日本の仏像は、「半眼」というそうであるが、見ていそうで見ていないような冷たい素振りだ。ブータンのご本尊は、カッ！と大きく目を見開いている。歴史の現実に存在した釈迦、グル・リンポチェとしっかり向き合って、対話するように「すべての生物に」祈りを捧げているのが、ブータン人の「祈りの姿」ではないだろうか。その祈りと誓いの実践が思いやりのある日常生活となっているのではないだろうか。

哲学的、宗教的とは言えない勝手な考察である。

ブータン最古といわれるキチュ・ラカンは、畑に建つて村のお寺という風情である。しかし、床に修行僧の礼拝で磨り減った足形の窪みが残っている。その旧堂に足を踏み入れた瞬間から、これまでの寺院とはちょっと違う空気を感じた。十一面千手観音はじめ、居並ぶ菩薩や忿怒尊に取り囲まれたご本尊（阿弥陀如来？）は、頬笑みをもって我々を迎えてくれた。期せ

ずして、同行僧侶たちによる般若心経の声明で堂内が満たされた時、声も出せずに片隅に正座したまま、心がうち震えていた。それなのに…、新堂の巨大なリンポチェ像の右脇に、とりわけ目を奪われてしまった。ガイドさんの説明は「観音菩薩」であったが、旅の本には「ターラー」（観音菩薩の涙から生まれた）とある。顔を右に傾けてニッと笑った口から、上下の歯がこぼれ出ている。歯を剥き出しの仏像に出会ったのは初めてで、何とも優しい、安心感のある妖しさに、他に誰も居なければ、差し出された手に誘われて抱きつきたくなるお姿である。観音さまだってターラーだって構わない。

いたるところに縦長の幟が立っており、青、白、黄、赤、緑のハンカチ大の麻布が万国旗のように張り渡されているのが目に入る。これはダルシンやルンタと呼ばれ、経文や祈願文がぎっしりと印刷されており、布が風にはためくたびに唱えたことと同じ功德になるという。ヒマラヤの風になびいて、ブータンは目に見えない祈りの言葉で満たされ、「祈りのところ」は大空の風に乗って世界中を駆け巡っている。

ブータン最後の日、パロのタクツァン僧院に面した丘に、両親の戒名をマジックペンで書き入れたダルシン（幟）を掲揚してもらった。供養のためソンナム師に頼んだのであった。しかし、サンスクリットかチベット語の経文の脇に漢字のあるダルシンを、地元の人はどう思うだろうか。東日本大震災、大津波災害に、決して多くない国家予算から百万ドルの義援金を日本に差し出し、全国民が祈りを捧げてくれたブータン人である。国民性や歴代国王の記事を読むたびに、私は日に日に恥ずかしくなる。ブータン人は、人が死ぬと輪廻転生して次の人生を送ると信じている。もちろん、人間に生まれ変わるとは限らないが、先祖供養はしないのだ。お墓も戒名も無いことを知るに及んで、恥ずかしさが増すばかりである。

ツアーの最終日はタイ・バンコクだった。同じ仏教国でありながら、エメラルド寺院の煌びやかさは、なぜこんなにも違うのだろうか。

大乘仏教と上座部仏教ということで納得しても、地理的、気候的な違いも判っていないながら、この目で見た国のあり様の違いは余りにも大きい。広い一戸建ての家に住み、簡素な民族衣装で、素朴な笑顔がとても印象的な雷龍の国だったから。

ブータン旅行社のドゥーバさんは、「我国の課題は経済発展である」と言っていた。ビルが建ち並び自動車が溢れて、Tシャツにジーパンの若者が闊歩するパロやティンプーになるのだろうか。何十年も以前から教育用語をすべて英語とし、環境破壊が問題になる遙か昔から環境保護政策を静かに実施していた事実もある。医療費無料も羨ましいが、東洋医学と西洋医学の両立制度を導入し、まさにホリスティック医学を先取りしている。「経済成長が国家の目標であってはならない。目標はただひとつ、国民の



幸せに尽きる」と言う英明で慎重なリーダーのもと、物質的な豊かさとは違う尺度で、独自の「豊かさ」を築いてきた国である。

国家の大小は、人口や金で決まるわけではないが、世界経済の重心にもならんとする中国、インドの両大国に挟まれた教養溢れる発展途上国は、どんな「国民総幸福量」を究めることになるのだろうか。

酒とモツの日々 (32)

会員番号 K.488 佐藤 滋

モーツァルト広場の敷居の低さは、「モーツァルトの素晴らしさを押しつけない」ことにあると思います。よく、「クラシック以外は聞かない」とか「モダンジャズは音楽ではない」とか「〇〇を聴け!」「〇〇は聴くな!」など、趣味のサークルは自分たちの趣味の優越性、差別化を誇る傾向にあります。

ところが、当広場代表の加藤氏は、モーツァルトを熱く語る時と同じ熱意で反体制歌手クビショヴァの魅力や、浪曲師・寿々木米若の佐渡情話などを語るのです。興がのれば演歌からシャンソン・・・等々、何と受け皿の広い方でしょう。「良いものは一つではない」という信念が伝わってきます。こういうお人柄だからこ

そ、多くの人から慕われているのでしょう。さらに「ハチャトゥリアンって嫌いなんだけど民族性の濃さは凄いよね?」「佐村河内は非道い。でもあのゴーストが作ったピアノ曲は良いなあ。どう思う?」と魅力探しに付き合わされます。好き嫌いは認めた上で、尊重すべき姿勢はいつも持ち続けていることが彼の懐の深さだと思のです。

文化を愛する心は尊いと思います。けれども好嫌の押しつけはナショナリズムへ、そして作品の差別は人の差別につながりかねません。

最近の隣国の挑発や批判には、さすがに辟易としていますが、といて人種差別やヘイトスピーチを繰り返す若者たちは、はたして19世紀

末から20世紀前半まで日本軍部が隣国に何をしたか、については学ぼうとはしないでしょ。同じように非情な核攻撃で多くの市民を殺戮した大国や、中立条約を一方的に破棄し多くの開拓民を虐殺した大国のことも学ぼうとはしないでしょ。(ジャズやロシア民謡は素敵ですけどね。) 彼らは自分達の都合しか考えず、自分達の好き嫌いを押しつけ、自分達の優越感を共有できる者のみで連帯しているのです。この人たちは趣味を通して自分の内面と向き合い、他者を学び、多様性を尊重し、自身の価値観を築き上げる、ということはないのでしょうか。その前に扇動され、そそのかされ、洗脳され、傷つけることに快感を覚える人間にされてしまい、しかも、そのことに自身は気づいていないのです。「大衆は限りなく愚かだ。(憎悪や差別の)感情だけで動く。だから簡単にモノにできる。(ヒトラー)」

歴史を学ぶことは過去の過ちを繰り返さないため、ということを若い人たちには是非考えて

いただきたいと思います。

加藤代表は、およそモーツァルトを嗜む環境とは無縁の世界でモーツァルトに出会い、音楽と一対一で向き合うことで作品と対話し、多くの方の思考を学びながらご自身の世界観、価値観を創られてきました。私はモーツァルト以上に、代表の姿勢から多くのことを学びました。それが私にとってはモーツァルト広場で得た最大の収穫だと思っています。

国レベルでは昔から国益重視のもと、利己主義、排他主義がまかり通ってきました。それは、これからも続くでしょう。怒りの感情で行動してはいけません。自制を見失いがちな時ほど立ち止まって振り返る、反省する、共感し、自信をもつことが大切なのです。音楽(特に無垢なモーツァルト)や美味しいお酒を友として。

音楽は心の友、そして良き音楽ほど、素敵な人格との出会いを用意してくれるのだと思います。モーツァルト広場で、どうか貴方にも素敵な出会いが見つかりますように。

事務局より

私事申し訳ないのですが、私が事務局としてモーツァルト広場会報の編集後記を書き始めてちょうど10年となりました。東京で大学を卒業後、就職し、秋田へ戻ってきて丸10年。縁あってモーツァルト広場に誘っていただき幹事、事務局としていろいろな方々とお話しをし、音楽を聴き(まだ皆さんの前で僕のトロンボーンを披露したことはありませんが)、こうして編集後記を書かせていただいてあっ

という間の10年だったなと思っています。それにしてもみなさんいつまでもお元気で変わりませんね。モーツァルト広場も今後20年、30年と活動を続けます。どうぞみなさん、これからもモーツァルトの音楽をたくさん聴いていつまでも若々しく元気で過ごしましょう。今後とも変わらぬお付き合いをよろしく願います。(K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております(H26年7月現在106名) [モーツァルト広場](#)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000 (諸会費、別途)

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058
又は 本田(事務局) 080(1673)8322